

Fernão Mendes Pinto の Peregrinação

—その構造—

岡村 多希子

「私はこの書きものを遺産として私の子どもたちに遺すが（これを書く私の意図はひと重にかれらのためなのだから）、それはのちに私が個々に詳しく扱おうと思っているように、インド、エティオピア、アラビア・フェリス、シナ、タルタリア、マカサル、サモトラ、またシナ人、シアン人、ゲオ人、レキオ人の文人たちがその地理書のなかで『世界のまっけ』と名づけているアジアの果てのあの東洋諸島のその他の多くの地方で、13度捕虜になり17度身売られた21年の年月のあいだに私が嘗めたこれらの苦勞と生命の危険を、この書きものを通じて子どもたちに知らせるためである。そしてこのことが教訓となって、人生の苦難にうちひしがれたひとが、なすべきことを行なう勇気をふるいおこすよう期待している」¹⁾とその冒頭に述べているとおり、Peregrinação は Fernão Mendes の自伝という形をとっている。しかしこの自伝の中で、作者は自分の冒険的生活のみを語ったわけではなかった。同時にかれは、東洋諸地方の地理、歴史、風俗習慣、産業、文物、宗教祭儀などなどについて詳しい報告をしたのである。かれが伝えたこれら東洋に関する報告は多岐多様にわたり、実にほう大な量にのぼった。しかも、その多くが奇想天外と思われる冒険談と渾然一体を成しているところから、当然ながら Fernão Mendes の言っていることはどこまでが真実なのかということが早くから問題とされた。

Peregrinação は真実の自伝なのか それともフィクションなのか。かれはほんとうにシナの奥地に足を踏み入れタルタリア人と接触したことがあるのか。自称どおり、日本に漂着した最初のヨーロッパ人のひとりなのであろうか。今までのPeregrinação をめぐる議論、研究のほとんどすべてが、作品の内容の信憑性に関する問題に集中していたかに思われる。そして、この点については、Fernão Mendes の名が当時のヨーロッパ世界で 大ぼら吹き の代名詞として通っており、William Congreve の喜劇の中にまで一級 の うそつき として登場している事実²⁾ からみて、Peregrinação が荒唐無稽なフィクションと一般にみなされていたことは疑いないようである。

ところが、今世紀に入って、イエズス会士書翰の中から Fernão Mendes Pinto の書翰および かれのアジアにおける行動を伝える その他の書翰が見出されるに及び、必ずしも かれの記述のすべてが荒唐無稽とは言い難いことが明らかとなるにいたった。そして現在では、Peregrinação はフィクションと事実を巧みに織

りこんだ文学作品であるということに、ほぼ研究者の意見は一致している。たとえば、数少ない Fernão Mendes Pinto 研究者のひとり Le Gentil は、作者は実際の経験のほかに伝聞や文献による知識を脚色してこれをすべて自分の個人的体験として語ったものであり、Peregrinação は事実の記録というよりもロマンである、と結論している³⁾。

心理的にまったく異なるさまざまな人間たち、事件、嵐、難破、捕囚、戦争、海賊行為、未知の国への探検、東洋の諸国諸部族の歴史、王たちの興亡、地理、風習、思想、文化など、人間が成し得る また人間にふりかかり得る ありとなる事象を、作者は豊かな空想力を駆使して、さまざまに組み合わせて織りませ、起承転結のある無のドラマを構成し、さらにそれらを複雑にからみ合わせてみごとな構築物に仕立てたのである。

では、これら さまざまなテーマは どのように扱われ組み合わされているのであろうか。

全篇を貫く軸は Fernão Mendes の冒険な放浪の旅である。自己の意志により、あるいは他人の命令により、あるいは運命の赴くままに 西はアビシニアから東は日本、北はタルタリアから南はスンダの海まで、アジアのいたるところを かれは訪れる。作者自身の体験 いわば自伝を第一の要素とすれば、第二の要素はアジアにおけるポルトガル人たち、いわゆる冒険商人たちの冒険的生活である。この代表的なものに Antonio de Faria の航海があげられる。そして第三に、この作品のきわめて重要な要素として東洋世界の事情紹介がある。これは、諸国の地誌、歴史、部族や王たちの年代記、戦役、人物描写などより成り、作者が訪れた先々で、その土地のことを読者に紹介するという形をとって語られる。最後に、異国情趣ゆたかな冒険ものがたり というこの作品が与える印象とは全く異質な、イエズス会士の東洋布教活動がある。とりわけ Francisco Xavier の日本渡航からその死にいたるまでの事情がこまかく語られており、この第四の要素は、他の三要素が血なまぐさく、人間的欲望をあらわにした異国的雰囲気を帯びているのに対し、厳しゅうで宗教的な調子につつまれている。

これら四つの要素が どのような現われ方をしているかによって、私は全篇を七部に分ち、さらに それらを、ほぼ Fernão Mendes の旅行過程にそって、細分してみた。

第一部 「自伝」

はなしは ほとんどすべて一人称単数をもって進められ、Onor女王と Vaz Coutinho の対立、Achem軍と Bata軍の戦争、Aarú王国の運命など東洋諸国の歴史に

一部分触れはするものの、その大部分は作者の自伝である。Malaca 司令官 Pero de Faria に仕えるまでは Fernão Mendes 自身の意志に基くか あるいはその場の成行きまかせの航海であるが、Pero de Faria に会ってのちは、かれの航海は いずれも Pero de Faria の命令によるものである。しかし実際には、途中で難破したり捕虜になったりして余儀なく見知らぬ遠隔の地を旅することになるわけである。

1. 冒険生活まで

私は Montemor -o- Velho に生まれたが、1521年12月13日におじに連れられて Lisboa に来た。/年半ほど さる名家の婦人に仕えたのち、Setúbal 行の船に のりこんだところ、船がフランス海賊に襲われた。やっと難をのがれ、ふたたび Setúbal に行くと、Mestre de Santiago の Francisco de Faria 家に奉公した。しかしながら給料が少なく生活を支えるに充分ではなかったので、「良かれ悪しかれ身にふりかかる運命を甘受するつもりでインド行きの船にのりこむことに 決意した」 (Cap. 1)

2. Abissínia に

1537年 3月11日インド行きの艦隊にのり組み、同年 9月 5日に Diu 要塞に着いた。(Cap. 2) そして Diu 到着の17日後、友人が「簡単に金持になれると 約束してくれたので」かれが船長をしている fusta 船にのって、途中 Massua 近くでトルコ船と闘ってこれを征服し (Cap. 3)、Arquico に向かった。そこから他の3人のポルトガル人とともに、当時 Preste João の母君の護衛にあたっている Henrique Barbosa に会うために陸路 Gileitor 要塞に行き、そこに着くと10月4日に Henrique Barbosa ら一行とともに Preste João の母君に会見した (Cap. 4)

1537年11月 6日インドに向けて そこを発ったところ、途中3隻のトルコ船に襲われ、私は他の9人のポルトガル人とともに捕われて Moca の町に連れて行かれ、町の地下牢に17日間つながれていた (Cap. 5) 競売にかけられた結果、私はある棄教ギリシャ人に買いとられ、3ヶ月後ユダヤ人の手に渡り、Ormuz で Pero Fernandez によって救出された (Cap. 6)

Ormuz から Goa に向かったが、途中 Diu で要塞がトルコ艦隊に包囲されているのが遠くから見えた (Cap. 7) そこで Diu に寄港せずに Chaul を経て Goa に行った。途中で、トルコのガレー船を拿捕しに Onor に行く Gonçalo Vaz Coutinho の fusta船にのり移った (Cap. 8)

3. Goa と Malabar 海岸で

Onor 女王が Vaz Coutinho の申し出を丁重に断ったので、かれはトルコ人と戦うことに決意し、敵味方とも熾烈な戦闘を交じた (Cap. 9, 10) ポルトガル側は手痛い打撃を受けたが、Onor 女王もポルトガルを敵にまわすことの不利を悟り、Vaz Coutinho に講和の申し入れを行なった (Cap. 11)

Vaz Coutinho は Goa に凱旋し、私は Goa 到着20日後に戦傷癒えたものの生活の目途がつかなかったので、Malaca 司令官に着任しようとしている Pero de Faria に仕えることにした。そして包囲されていた Diu 要塞救出に向かう副王 D. Garcia de Noronha の艦隊に Pero de Faria とともにのり組み、1538年12月6日 Goa を発ち、1539年1月16日に Diu に到着し、Diu 要塞再建に加わった。その後、Pero de Faria とともにふたたび Goa を経て、1539年6月5日 Malaca に到着した (Cap. 12)

4. 第一次 Samatra 航海

Achem 王の攻撃の脅威にさらされた Samatra 島の Bata 人の王が Malaca 司令官 Pero de Faria に援助を求めてきたので、Pero de Faria は王の大使に武器弾薬を与えた (aCap. 13) それから20日後、Pero de Faria は Achem の情報を手に入れるため、Panaja の Bata 人の王のもとに大使として私を派遣することにし、私はイスラム教徒 Coja Ale とともに Panaju に向かった。途中、Samatra 島の沿岸でさまざまな珍しい動物たちを目にした (Cap. 14)

Panaju に着くと、王は出撃の準備中であり、私は Achem に向かう Bata 軍に同行した。間もなく Achem と Bata の両軍は熾烈な戦闘を開始し、Bata 軍は一旦は優勢に立ったものの、Achem が軍を立てなおしたため、結局退却を余儀なくされた (Cap. 15~18)

私は Coja Ale とともに Panaju から Queda 王国に行ったが、王の悪口を言ったために、ここで Coja Ale が殺され (Cap. 19)、難をのがれた私は Pulo Çambilão 諸島を経て大急ぎで Malaca に帰ると、Pero de Faria に航海中のできごと、航海中に見聞した付近一帯の地理、産業、文物、交易の様子を報告した (Cap. 20)

5. 第二次 Samatra 航海

同じく Samatra 島の Aarú 王の大使が Malaca 司令官を訪れ、Achem 撃退のた

めの軍事援助を求めた。Pero de Faria は一度はそれを拒んだものの、思い直して、援助物資をもって Aarú 王国に行くよう私に命じた。そこで私は1539年10月5日 Malaca を発ち、Aarú の町に行った (Cap. 21) 滞在中 Aarú で私が見た軍備はきわめて貧弱で、必らずや Achem に敗北するであろうと思った (Cap. 22) 5日後、私は Aarú を発ったが、途中で船が沈み、Siaca の漁師に助けられたものの、奴隷として役立たずであったため外に放り出された。しかしさいわいにあるイスラム教徒に買いとられて Malaca に帰ることができた (Cap. 23~25)

ところで Aarú 王国の運命について述べると、Aarú 軍は味方の司令官の裏切りであって全滅し、戦死した王は Achem 王によって残忍な処罰をうけた。ポルトガル人に友好的であったこの Aarú 王に Malaca 司令官がはじめから軍事援助を与えていたら、かれを救出できたであろうと私は思うのである (26~27)

生き残った Aarú 王妃は Malaca の Pero de Faria のもとに援助を求めに来たが、Pero de Faria が自分の期待に応えてくれないことを知ると、ただちに Bintão に行った。Bintão にいた Jantana 王は Aarú 王妃に結婚を申し込むと同時に、Aarú 王国の再興を約束し、Achem 王に大使を送って Aarú 王国返還の要求をしたが、Achem 王は要求を拒んだ (28~31) こうして、Jantana 軍と Achem 軍は互いに大軍を動員して戦闘を交じえ、Jantana 王が勝利し、Aarú 王国は Achem から解放され、Jantana 王の支配下にあったが、1564年ふたたび Achem に奪われてしまった (Cap. 32)

6. Malaca 東岸航海 (Pao と Patane)

さて、先の奴隷生活中にうけた病いが回復すると、Pero de Faria の命令で、私は Tome Lobo というかれの feitor に商品を渡すために Pão へ、また5人のポルトガル人捕虜の釈放を交渉するために Patane に行くことになった。途中で14人のポルトガル人難船者を救い、Pão に着いた (Cap. 33) 用事をすまし、全商品を整理していた Tome Lobo とともにそこを立去ろうとしていた矢先、Pão 国王が殺害されて、土地に暴動が起ったため、私たちは急いで Patane に渡った (Cap. 34~35)

7. 第一次 Siao 航海

すると、そこに商品を売りに来た António de Faria de Sausa という男が着いた。かれは Patane で商品が売れないのを見て、Siao の Ligor に自分の feitor の Cristóvão Borralho を派遣することにし、私も一財産作ることを夢見てその

一行に加わった。しかし、Lugor で私たちはイスラム教徒海賊 Coja Acem に襲われて森の中に逃げこみ、結局最後まで生き残った私と Cristóvão Borralho の2人は親切な婦人商人に助けられて Patane に戻った。António de Faria は借金をして投資していたところから、自分の商品を奪ったものを探しに行くことに決意し、他の商人たちもこれに同意し、海賊 Coja Acem 討伐隊を組織した。そして、無一物の上、Malaca に借財のある私もこれに加わることにした (Cap. 36~38)

第二部 「António de Faria の冒険」

ここからはなしは一転して、Peregrinação の中でももっともはなはなしい冒険のひとつがはじまる。主人公は António de Faria。Fernão Mendes は António de Faria を首領とする集団の一員にすぎない。主語はつねに「かれ」すなわち António de Faria, あるいは集団全体を指す「私たち」である。「私」は集団の中で個性を失い、ごく稀にしか現れない。

António de Faria の一行は海賊 Coja Acem を求めて航海にのり出し、途中で出会う海賊たちをことごとく征伐するが、それは同時にかれら自身海賊や盗賊になってゆくことを意味するのであった。

1. シナ沿岸航海

1540年 5月 9日に António de Faria は Patane を出発し、Champá を経て北々西に進路をとった。途中 Champá 王国沿岸の Tobasoi 川で大海賊 Similau と出会い、これを征服した (Cap. 30~40) 1540年聖体祝日の前日 (5月26日) Tobasoi 川を出るとさらに Champá 沿岸を走り、Tinacoreu 川まで行き (Cap. 40)、そこから Cauchenchina 湾内の Pulo Champeiló 島に行き、ここから Ainao 島に向かった。Ainao 島の先端でポルトガル人の大敵、海賊 Quiai Taijão を征服し、口われていたポルトガル人の子どもを解放し、同時に莫大な戦利品を手に入れた (Cap. 42~43) Ainao 島の Camoi 湾に着き、同地がシナ王の真珠採取地であることや島の歴史と事情を土地の老人から知る (Cap. 44~45) Tanauquir 川に着いたところ、António de Faria は突然2隻の船に襲われたか、激しい戦闘の末にこれを敗った。それは、かつてキリスト教徒で Francisco de Sá と呼ばれたことのある Necodá Xicaulem という海賊であった (Cap. 46) さらに、Tilaumera 岬で停泊中、花嫁ののっている lantea 船舫たちの船を花嫁の船と思いこんで近づいて来たので、私たちはこの船を捕えて花嫁を奪った (Cap. 47)

こうして、持っていた商品を売ることができるといわれていた Muti-

pinão 港に到着したので、António de Faria は2人のイラム教徒をとらえて、土地の事情、交易状況、軍備、産業、宗教などについて情報を得て、早々にこの港で商品を売りつくして銀に替えた (Cap. 48~49)

さて Coja Acem の消息を求めてなおも Ainão 島岸を廻っているうちに Madel 港で Himinilau というシナ人海賊と闘い、かれらを征服し、首領を処罰して戦利品を奪った (Cap. 50~51) 海賊 Himinilau を征伐した António de Faria の威力に驚いた土地の人々がかれに他の海賊たちからの庇護を求めたので、António de Faria は貢物と交換に通行証を発行してやった (Cap. 52) こうして Ainão 島をめぐることに7ヶ月半経ったとき、私たちは泥棒島で台風のために難破し、多くの仲間と全財産を失い、散々苦勞をしたのち、島に寄港したシナ人の lantea 船を奪うことによつてこの島から脱け出すことができた。そして Liampó に行くにはさらに大きな船が必要だったので、Xamol という集落でふたたび小さな junco を奪ってこれにのり移った (Cap. 53~55)

Lamau 沿岸を航海しているうちに私たちはポルトガル人の味方であるシナ人海賊 Quiai Panjão の junco に出合い、かれと一緒に「海岸の工場で精練されている多量の銀のほかに銀でいっぱい非常に大きな家が6軒あり、そこでみな何の危険もなしに大金持になれる」という情報のある Quangeparu 鉱山に行くため、Anai 川に入った (Cap. 56) そして Chincheu 港に立寄り、Liampó に向かったところ、途中で8人のポルトガル人遭難者に会い、かれらから Coja Acem の消息を知った (Cap. 57) そこで Leiló 港に行つて戦闘の準備をととのえ、Tinlau 川に入って Coja Acem 一味と激しい戦闘を交じえ、これを征服し (Cap. 58~59)、António de Faria は、Coja Acem に襲われた先の8人の遭難者のうちの2人の富裕な商人にかれらの junco をとり戻してやった (Cap. 60)

莫大な戦利品を手に入れて、私たちは先の計画通り Quangeparu 鉱山に向かったが、途中で大嵐のため難破し、1隻の僚船が岸に押し流されて、5人の仲間が Noudai でシナ人の捕虜になってしまった (Cap. 61~62) António de Faria は仲間を救出するため、出会わしたシナ人の junco を捕え、かれらと交換に仲間を返してもらおうと mandarim に交渉したが、これを拒否された (Cap. 63~64) 怒った António de Faria は武力に訴えることに決め、全部下とともに Noudai を襲い、mandarim を鉄砲で撃ち殺したので、敵は全員逃げ出し、私たちは仲間を助け出し、戦利品を奪った (Cap. 65)

このようにして、途中で Prematá Gundel という海賊を征伐しながら (Cap. 66)、ついに Liampó に到着した。António de Faria のおかげで junco をとり戻した2人の商人がかれの寛大な行為と Noudai での出来事を Liampó の人々に知らせたので、Liampó のポルトガル人たちは António de Faria を賛えて、私た

ちを盛大に迎え入れてくれた (Cap. 67~68) 町をあけての歓迎ぶりはひとつ方ではなく、教会ではかれのために荘厳なミサがあげられ (Cap. 69)、豪華けんらんたる宴会、余興が続けられた。そして、この Liampó の滞在中に Quiaí Panjão が死んだため António de Faria は Quangeparú 鉱山行きをあきらめて、海賊 Similau と契約を結んで「17のシナ王の墳墓と無数の金の偶像が金の聖堂にしつらえられているという」Calempluy 島に行くことに決意した (Cap. 70)

こうして Liampó 到着5ヶ月後の1542年 5月14日に、António de Faria は Similau の案内で、「ポルトガル人がかつて見たことも渡ったこともない海」へと出発した (Cap. 71) そして土地の人々に感づかれることを怖れて、ナンキン湾を遠く迂迴して川を何度も曲がり、北方の珍しい動植物や人々を見ながら、さまざまな苦勞の末に、8ヶ月の航海ののちにやっと Calempluy 島に着いた (Cap. 72~75) しかし、島に仲々着かなかつたためにその言を疑われた Similau は生命の危険を感じて、島に到着する直前に逃げ出してしまっていた (Cap. 74)

さて島に着くと、António de Faria は島の様子をよく観察した上で上陸し、前面に見える堂の中に入り、安置してある棺の中の宝物を奪った (Cap. 76) 堂守の抗議に対し António de Faria はことば巧みな応答をし、必要な情報を手に入れ、船にひきあげた (Cap. 77) 翌朝ふたたび宝物を強奪する予定でいたところ、堂守の急報によって島は警戒態勢に入り、António de Faria は止むなく莫大な獲物を手に入れずじまいにして島を去らなければならなかった (Cap. 78)

そこで早く戻れるようとナンキン湾のまん中を航海して行ったところ、私たちは、1542年 8月 5日、シナ人が台風と呼んでいる嵐に襲われ、António de Faria を含む仲間の大部分が死に、それまでに手に入れたすべての富は一挙に、失われてしまった (Cap. 79)

第三部 「シナとタルタリアの事情」

既にみてきたように、第一部と第二部は、それぞれ Fernão Mendes と António de Faria を主人公とする明らかな冒険談とみなすことができる。第三部にも難船者たちの冒険、タルタリア人のシナ侵略というようなものが含まれはするが、極東の事情解説に大きくページを割いている点、第三部は明確に前二部とはその内容を異にしていると言える。すなわち、シナやタルタリアの諸都市の模様、歴史、文物、宗教祭儀、風俗、習慣などの描写に重点がおかれ、中でもシナに関する作者の知識とシナに関するかれの評価がふんびんに盛りこまれている。

第二部の冒険者たちは一夜の嵐でその大半が海の藻屑と消え、首領の António de Faria もここでその生を果てたようである。残された11人のポルトガル人はシ

ナ内陸、タルタリア、Cauchenchina、日本へ、運命と波に翻弄されながら流れ歩き、放浪の途中でひとり減りふたり減って、最後に日本に航海したときには11人が3人になっていた。

ここには中心的人物は存在せず、主語はつねに一人称複数「私たち」をもって表わされる。とくに前半では、タルタリア王に仕えることになった大胆なポルトガル人 Jorge Mendesなど1,2の人物が表面に浮かびあがるにすぎない。ただし最後の日本航海の部分では、日本人に火器を伝えた Diogo Zeimoto と日本の Bongo 王国で主役を演じる作者自身が、個性のない夢名集団の中からとび出してきて、生き生きと描かれる。

1. シナ内陸の旅

助かった私たち14人のポルトガル人は、死者を埋葬し終ると川沿いに歩きはじめ、途中で3人が死んだ (Cap. 80) が、残り11人はようやく宿屋のある村に着き、ここから施療院に行って必要な品を与えられて手当をうけた (Cap. 81) そこから私たちは、Nanquim を経て Cantão に行くつもりで歩きはじめたが、途中 Xiangulé で泥棒と間違えられ、水蛭に血を吸いとられるのを我慢しながら池の中に2日間身を隠していなければならなかった (Cap. 82) しかし、さらに旅を続け、ある貴族の別荘に着き、ここで手厚いもてなしをうけた (Cap. 83) 司直と掛り合うことを怖れて大きな町を避けて2ヶ月ちかくあちこちさまよい続けた末 Taipor という町に着いたところ、巡廻裁判所長官である Chumbin の目にとまって逮捕された (Cap. 84) 地下牢に26日間つながれたのち、シナ帝国第二の都市である Nanquim に送られ、ここで1ヶ月半拘留されて笞刑と親指切断刑の判決をうけた (Cap. 85) 笞刑はただちに執行され、そのために2人が生命を落とし、残った私たち9人は、慈善院の修道士の尽力により、親指切断刑をまぬかれるため Pequin で再審をうけることになった (Cap. 86)

修道士に丁寧な紹介状を書いてもらった私たちは Batampina 川を通過して Pequin への旅へのぼったわけであるが、この大河の沿岸にある諸都市、町、部落で見た事物について語ることにしよう〔以下88章から100章まで〕すなわち、Nanquim 市の地理、建造物、産業 (Cap. 88) Pocasser 市の外観、建造物、とくに Tauinarel をまつた寺院内の様子 (Cap. 89) Xilingau と Junquileu の町の外観、文化 (Cap. 90) 捕吏である Chifu の妻の病気のため私たちは5日間 Sampilai の町に滞在した。この町で私たちは Inês de Leiria というキリスト教徒の婦人に会い、かの女の家で手厚いもてなしをうけると同時に、かの女の来歴と町のキリスト教徒の現状を知った (Cap. 91)

Sampital を出発後さらに Batampina 川をさかのぼり、Pacão と Nacau の両市に着いたが、この2都市はシナ帝国の起源とゆかりの地である。そこで私がシナ人から聞いたそのシナ帝国の歴史を語ることにしよう〔92章から95章にシナ創設の由来と主だった王の事績が述べられる〕すなわち、Nanca とかの女の3人の子どもたちに対する Silau の迫害 (Cap. 92) 苦境にある Nanca とその部下に起った奇跡 (Cap. 93) シナ帝国の最初の4都市、Pequim, Pacão, Nacau, Nanquim 創設の歴史と Pequim 市城壁の由来 (Cap. 94) Pequim 市城壁にまさるシナとタルタリアを分かち城壁建造の由来とその管理制度の偉容 (Cap. 95) Pacau と Nacau から Mindó を経て廃虚の町 Fiungarnosé にいたるまでに見聞したものと Fiungarnosé の荒廃の原因 (Cap. 96) 川に浮かぶ無数の船の町の交易の繁盛ぶり (Cap. 97) 動く船の町のすぐれた商業上の制度と規律 (Cap. 98) 国中を縦横に流れる川に作られた動船の町の種々様々の珍しい商売。シナ帝国のさまざまな偉大な点 (Cap. 99)

さて、このような素晴らしい河上の都市を見ながら、私たちは1541年10月9日ついに大 Pequim 市に到着し、牢に入れられた (Cap. 100) ここにつながれていた6ヶ月半のあいだ私たちは牢内で辛酸をなめたが、慈善院のタニゴルたちの庇護のおかげで、Quansi 工事に1年間従事すること条件に自由の身となった (Cap. 101~103)

ところで、「世界の帝国の首都と真実称してさしつかえない この Pequim 市に関し、また同市で私が気のついたいくつかのこと、すなわち同市の富裕さ、制度、偉大さについて、その裁判の規則と管理、国中に物品を共給する素晴らしいやり方、軍法による退役者の軍務にたいする報い方について、その他この種のこともについて」私は語るべきであると思う〔105章から114章に以上というシナの事情が述べられる〕すなわち、Pequim 市の位置と外観、建造物、施設、旅館とそこで開かれる宴会 (Cap. 105) 有名旅館での宴会の開き方。法学院とその最高院長の権勢ぶり (Cap. 106) Pequim市城壁の警備態勢、城壁内にある3800のバゴテの祭儀、街路の治安維持の方法、運河の見事さ、年中毎日4つつ立つ市場での商品の豊富さ (Cap. 107) Pequim 市内には Sinanguibaleu すなわち流罪者収容所と呼ばれる牢獄があり、これはタルタリア国境にある城壁補修工事に従事するための流刑者を一時収容しておくところであり、その牢獄の運営の仕方は実によくできている (Cap. 108) 私たちが素晴らしいと思ったもうひとつの建造物は「死者の宝」と呼ばれるどくろを納めてある家々であり、死者が自分の霊を慰めてもらうためにそこに寄付する莫大な財産の一部が Sinanguibaleu の流罪者の食費に充てられているのである (Cap. 109) 私たちが感心した第三の建造物は Nacapirau すなわち「天の女王」という豪荘華麗な建

物で、この中で私たちはさまざまな珍しい奇怪な偶像を見た (Cap. / / 0) Pequim 市内で私がもっとも壮観だと思ったのは、Batampina 川の中州にある建造物で、これには113棟のシナ王の礼拝堂があり、ここには王たちの霊をまつためにさまざまな偶像、塔、鍾が置かれている (Cap. / / 1) Pequim 市には孤児、捨児、不具者、癩疾の淫売婦、貧者に対しきめこまかい福祉制度が確立している (Cap. / / 2) 凶作にそなえてシナでは国中に穀倉が設置されており、その穀倉の穀物は毎年新しいものにとり替えるようになっている (Cap. / / 3) シナ王の王宮に住んでいる人の数、シナの高級官僚の構成、国民の宗教上の無知蒙昧さ、いくつかの宗派の悪弊 (Cap. / / 4)

1544年 1月13日、いよいよ私たちは流罪刑に服するために Quansi に連行された。そしてそこで1ヶ月経ったとき、つまらぬ口論から刃傷沙汰に発展して、それが囚で獄に投ぜられるにいたった (Cap. / / 5) 囚人として町で物乞いをしているときに、私は偶然にも Tomé Pires とともに27年前にシナの捕虜となった Vasco Calvo というポルトガル人に会い、私たちはかれの家で一夜を過ごした (Cap. / / 6)

ところが、1544年 7月13日、Quansi は突如としてタルタリア軍に襲われ、私たち9人の仲間は、シナ人の捕虜からこんどはタルタリア軍の捕虜となった (Cap. / / 7) さて、タルタリア軍は Quansi 攻略の2日後 Nixiamó 要塞の攻撃につとめたが、要塞は頑強に低坑し、攻略は困難をきわめた。このとき、たまたま私たちポルトガル人に関心をもったタルタリア軍の頭官に、Jorge Mendes が 要塞攻略の戦術を援けることを申し出た (Cap. / / 8) 私たちは将軍 Mitaquer の 面前に連れてゆかれ、Jorge Mendes は要塞を視察したのち作戦を練り、それはみごとに成功した。 そのおかげで、恩賞として Jorge Mendes は1000タエル、他のポルトガル人は100タエルを与えられた (Cap. / / 9) 翌日 Mitaquer は Pequim 市近くにあるタルタリア王の野営地に向けて出発し、私たちも将軍に同行した。王の野営地に到着14日後、私たちは Mitaquer のもとに呼ばれ、タルタリア王に謁見することになり、その翌日かれの案内で国王の陣屋を訪問した (Cap. / 20 ~ / 22) タルタリア王は、兵力と財力を使い果してもなお Pequim を陥せないのを見て、故国に退却することに決め、1544年10月17日に Pequim 市を出発し、タルタリアの町 Lançame に到着すると、ここで兵の大部分を解散させた。(Cap. / 23)

2. タルタリアの旅

その26日後、王はさらに大きな町 Tuimicãoに移り、ここで近隣の国々の 王子

や大使の訪問をうけた。かれらのうちでも Carão 王子の大使一行はもっとも華麗であり、その宿舍も豪華をきわめていた (Cap. 124) ところで、タルタリア王が Pequim 包囲をふたたび試みようとしているのを知り、私たちは約束されていた私たちの釈放の機会を失することを恐れ、Mitaquer にせがんで、国王に約束の履行を思い出させた。こうして私たちはタルタリア王が Cauchenchina 王のもとに派遣する大使にあずけられたが、Jorge Mendes だけはタルタリア王のもとに留まり、王に仕えることになった (Cap. / 25)

私たちは、1544年 5月 9日に Tuimicao を出発し、Puxanguim, dinxau などの町を経て、Singuaatur という寺院に着き、ここで死者の広場を見物した (Cap. / 26) ここから Quanginau の町に行き、かれらのもとにおける法皇のようなものにあたる Lechume の Talapicor のための祝祭を見物した (Cap. / 27) 私たちは Quanginau から Lechume へ、さらにタルタリア国のはずれの町 Rendecalem へ、そして Xinaleigrau の領地にあら Voulem 集落まで行った。ここで水先案内人を与えられて、広大な荒野の中を川沿いに旅をし、Singapamor 湖、Cauleipute 部落、Cauchenchina 王の臣下の領地 Tarem を経て、ついに Cauchenchina の大都市 Xolor に到着した (Cap. / 28)

3. Cauchenchina を経てシナへ

この Xolor から私たちはさらに旅を続け、シナと Cauchenchina の国境にある Manaquileu の町を経て、Tinamquaxi に宿泊した。Cauchenchina 王が Fanaugrem にいることを知り、私たちは険しい山を越えて Taraudachit, Lindaupano村を経て Latiparau の大修道院に着いた。ここで国王の命令を待って Agimpur 村に移った (Cap. / 29) 国王は義弟をしてタルタリア王の大使を Agimpur 村に出迎えさせ、大使は荘重華麗な行列に伴われて王宮に案内された (Cap. / 30) 私たちが Fanaugrem 村に到着して13日経ち、国王が首都 Huzangué に発とうとしていたとき、タルタリアの大使は、私たちポルトガル人のシナへの渡航許可を国王から手に入れてくれた (Cap. / 31)

そこで私たちは「当然想像できるであろうような不安と喜びを抱いて」1月12日にこの町を出発し、Quangeparu の町を経て、13日目にシナの Sanchão 港に着いたが、ここには Malaca 行きの船がなかったため、クレグア先の Lampacau に行った (Cap. / 32)

4. 第一次 日本航海

ここでどの船に乗るかという点について争っているうちに停泊中の船がことごと

とく出発してしまったため、私たち8人のポルトガル人は止むなく、そこに立ち寄ったシナ人海賊 Samipocheca の船にのりこんだ。ところが、Lailó 目指して Lamau 沿岸を航行中に、7隻の junco を率いた海賊に襲われ、味方の1隻が炎上したさいに5人のポルトガル人が死んでしまった。残った3人のポルトガル人を含む私たちは、さらに航海を続けるうちに大嵐のために陸地から離れてしまったところから Lequio 人の島に避難しようとしたが、潮流に押し流されて結局 Tanixuma 島に漂着した (Cap. / 32)

Tanixuma 島の王 Nautaquim は私たち3人のポルトガル人を見ると、シナ人ではないことに気づき、私たちに関心を寄せ、ポルトガルについて さまざまな質問をし、私たちを大いに歓待してくれた (Cap. / 33) 船長のシナ人海賊は島で商品を完売して莫大な利益をはくした。私たち3人のうち Diogo Zeimoto の持っていた鉄砲を Nautaquim はひどく気に入ったので、Zeimoto はかれに鉄砲を贈って、射撃と火薬の製造法を教えた。この国には かつて鉄砲というものが存在しなかったところから、王は鉄砲に夢中になって早速これの製作にとりかかり、あっという間に鉄砲は日本中に広まってしまった (Cap. / 34)

私たちが Tanixuma 島に着いて23日経ったとき、Bungo 王の使いが島を訪れ、ポルトガル人に会いたいという Bungo 王の望みを伝えた。そこで私が選ばれて、九州にある Bungo 王国の首都 Fucheo に赴いた (Cap. / 35) 私は Fucheo に滞在中、王や王妃や王子たちがたづねる さまざまな質問に答えた。ところが、王の次男 Arichandono が私の鉄砲に興味をまし、私が昼寝をしているすきに鉄砲に手をかけて大怪我をし、私はあらぬ殺人の疑いをかけられることになった (Cap. / 36) 結局誤解が解け、また私の介抱で王子の怪我が治癒したので、王は私に大いに敬意を払ってくれた。やがてシナ人海賊が帰国するという報に接したので、私は Tanixuma 島に戻り、私たちは Liampó に向かった (Cap. / 37)

第四部 Lequio 島での難破と救出

第四部は物欲にとりつかれたポルトガル人の一団の身に起った、起承転結のある こじんまりとした ひとつの まとまった教訓ばなし とみなすことができる。一獲千金を夢見て十分な装備もないままに日本に向かったポルトガル人は難破して Lequio 島の獄につながれるが、島の女性たちの奔走のおかげで赦される。ポルトガル人商人たちの飽くことを知らぬ貪欲さと 島の女性たちの暖い人間性を対比させながら、この極東の島の人々の心理を語り、正義と仁慈の何たるかを教えようとしたかに思われる。

ノ. 大 Lequio 島への航海

Liampó に着いて、その地のポルトガル人たちに、「私たちが発見した新しい日本の国について、そこにある大量の銀について、またシナの商品で得た多大の利益について」話したところ、食指をそそられたかれらは、土地の商品を買いあざると、それらを積んで日本へ向かった。ところが途中で大嵐にあい、多数の仲間が生命と商品を失い、私たちわずかのものだけが大 Lequio 島岸に漂着した (Cap. / 37) 私たちは縛り上げられて Pongor の町に連行され、王国の総督、裁判所の buroquem の審理をうけた。連行される途中、ひとびとは私たちの哀れな様子に同情して衣類や多額の喜捨を施してくれた (Cap. / 38 ~ / 39) 私たちは Malaca の正直な商人であると申し立てたが、難破した船から流れついた多量の商品は不当に手に入れたものであるというシナ人たちの中傷のために、私たちは獄に投ぜられた。そして一旦は釈放の決意をしたにもかかわらず、入港したシナ人海賊の中傷によって、王は私たち全員に八裂き刑を言い渡した (Cap. / 40) しかし、町の女たちは私たちの死刑判決にいたく同情し、王の母君にあてて助命の嘆願書を書いてくれた (Cap. / 41) 母君のとりなして王は私たちの釈放を認め、私たちを帰国させることに同意した (Cap. / 42) 私たちは出発までの 46 日間、土地のひとびとの手厚いもてなしをうけ、Liampó に向かうシナ人の junco にのりこんだ。ところでこの大 Lequio 島について簡単に述べれば、きわめて豊かな土地で、2000 人の兵士がいれば、この島を占拠でき、インドよりもはるかに大きな利益が得られるであろうと、私は思う (Cap. / 43) 私は Liampó に着くと、ここからさらに Malaca に行った (Cap. / 44)

第五部 「Brama 王国年代記を中心とする東洋諸国の歴史と文物」

これまでこの作品の中で第二義的な位置しか占めていなかった要素、すなわち東洋諸国の王や部族の年代記が大きく前面に押し出されているのが、第五部の特徴である。諸部族間の戦争、戦敗国に対する残忍な処刑、恋や名誉にからむさまざまなエピソードが語られはするものの、第五部の軸は、異常性格者とも思われる暴虐な Bramá 王の年代記で、これが何度か途中で中断されながらも、最後まで続く。そして、これら東洋諸部族の歴史に、ポルトガル人たちの冒険、東洋諸地方の風俗習慣、文物、宗教祭儀の描写が加わる。これら三つの主題は互いにかみ合い入り混じって、複雑で華麗なひとつながりの絵巻様を編み出す。その模様のあるところどころに、通常はポルトガル人冒険者たちの一団の中に埋没している作者の姿が見え隠れするのである。

Bramá 王の異常な人格のほか、小姓による Demá 王殺害事件、不貞な王妃による善き Siao 王の毒殺事件、邪悪な Bramá 王と対照的な Xemindó のキリスト教的仁慈あふれる人柄、好色なガリシア人 Diogo Soares のエピソードなどがとりわけ印象的である。

/. Martanão 航海

Malaca に行くと、Pero de Faria がまだ司令官をしていた。かれは、Martanão の王 Chaubainbá と講和を結ぶ使者として私を同地に派遣することにし、私は 1545年 1月 9日にネコダの Mama de とともに Malaca を出発した。私たちは Pulo Çambilão を経て Malaio の沿岸を航海したのち、Pisanduré 島に投錨した。島に上陸したところ、Tanaug-arim から敗走してきたと思われる多数の Achem 人の遺体に出会った (Cap. / 44) 私たちはここからさらに Pulo Hinhor 島に行った。ここでポルトガル人の味方であるキリスト教徒の小王がイスラム教徒叛徒のため王位を奪われていることを知り、私たちは かれのために叛徒を征伐してやった (Cap. / 45 ~ / 46) これがすむと私たちは、Lançarote Guerreiro がいると思われる Tanaucarim 港に向かって航海を続け、途中で3人のポルトガル人難船者を助けたり、出会わずポルトガル船に Achem の艦隊に注意するよう警告したりしながら、ついに1545年 3月27日ラザロの金曜日に Martanão 港に着いた (Cap. / 47) Martanão 港で私たちはポルトガル人に会い、港が Bramá 王に包囲されていることを知った。私は Bramá 王に味方しているポルトガル人司令官 João Caieiro に会い、Pero de Fariaから言いつかっている用件をすませたので、航海期が来次第 Malaca に戻ることにした。

ところで、ここで見た Martanão 王 Chaubainbá の運命について簡単に述べることにしたい。〔以下152章まで Chaubaibá の運命が語られる〕 すなわち、Bramá 王に包囲された Chaubainbá は万策つきて、莫大な財宝とひきかえに自分を救出してくれるよう João Caieiroに頼んだが、他のポルトガル人の反対にあって、João Caieiro はこの申し出を断った (Cap. / 48) ポルトガル人の救援をうけられないことを知った Chaubainbá は、ポルトガル人の忘恩行為を欺き、また Bramá 王に降服を申し入れた。Chaubainbá の降服の儀式はものものしく、Bramá 王の行列には諸外国兵が参列した (Cap. / 49)。Bramá 王の行列のあいだを引き出されてきた Chaubainbá はポルトガル人の前まで来たとき、João Caieiro に向かってポルトガル人の忘恩行為をなじった (Cap. / 50) Martanão は Bramá 王の強奪と兵士たちの掠奪のままにまかされ、建造物はことごとく灰と化した。さらに Bramá 王は Chaubainbá に対する報復処置として、Chau-

bainbá の娘をはじめとする貴族の女性140人を21基の絞首台で絞首刑に処した (Cap. / 51 ~ / 52)

2. Pegu で

さて、Bramá 王はその苛酷な裁きをすませると、Pegu に向かったが、Martañão の地に Bainhá Chaque を総督としてのこしていった。この総督は Gonçalo Falcão というポルトガル人の 訴によって、私が Malaca からのってきた junco を奪い、私を国王の捕虜にした。私は Pegu に連行され、Diosorai という Bramá 王の財務官のもとで2年半のあいだ捕虜となるにいたった。そこで、この2年半のあいだに私が経験したことを語ることにする (Cap. / 53) 1545年 3月 9日に Bramá 王は Prom 包囲に出発し、同年 5月 3日に Prom の町に総攻撃をかけたが、町の守りはかたく、Bramá 軍は苦戦を重ねた。しかし Prom 側に裏切り者が出て、町の城門が内側から開かれ、Bramá 王は町にたいし想像し得るかぎりの暴虐を働き、捕虜にした王と王妃に無残な復讐をした (Cap. / 54 ~ / 55) Prom の救援に来た Ana の軍隊が Meleitai にいることを知った Bramá 王はただちにここに向かい、熾烈な戦いののちに、Ana 軍を壊滅させた (Cap. / 56) Bramá 王はさらに軍を Ana に進めたが、町の守りはかたく、しかも Ana 王が Prom 奪還のために Siamon から援軍の約束をとりつけていることを知り、これに対抗するために、私を含む8人のポルトガル人捕虜を預っていた財務官 Diosorai を Calaminhan に派遣することにし、私たちは Diosorai の捕虜としてかれとともに Calaminhan への旅にのぼることになった (Cap. / 57)

3. Calaminhan への旅

Bramá 王のことはのちにまた触れることにして Calaminhan 王国の首都 Timplao の町までの旅について語ることにする。1545年10月私たち8人のポルトガル人は大使 Diosorai とともに Ana を出発し、Guateldai の集落を経て Angegumá 川にいたり、この川を Gumluin の町までさかのぼり、ここからさらに大都市 Çatamás へ、そして Campalagor 要塞に、またそこから Tinagogo すなわち「一千神の神」というパゴデに行った (Cap. / 58) このパゴデに行ったのは、そこにある病院で大使が病気を治療するためであったが、そこにいた28日間のあいだに見たことを述べてみよう [以下 / 6 / 章まで] すなわち、Tinagogo のパゴデで行なわれる異教徒たちの祭りのにぎわい、パゴデの建造物について (Cap. / 59) 祭りのさいの壮麗な行列、 にあずかろうとする人々が行なう血なまぐさい犠牲の数々について (Cap. / 60) 願をかけた罪を贖ったりするために人々

が捧げる供物、Tinagogo の醜怪な偶像、洞穴における聖者たちの数々のいまわしい苦行について (Cap. / 6 /)

大使が全快したので私たちは Tinagogo のパゴデを出発して旅を続け、Singipilau の町に行き、ここから王国の砦に到着し、ここで大使は Timplão にいる Calaminhan 王に謁見するための王国の総督 Queitor の伝言を待った。ここで待っているあいだに私たちは土地にあるさまざまな建造物、偶像などを見物し、その歴史を知ったが、ここでヨガの行者と結婚している ひとりのポルトガル女に出会った (Cap. / 62) さて9日が過ぎ、Diosorai は豪壮華麗な出迎えをうけて Calaminhan 王の宮殿に案内されたが、宮殿内の部屋々々、庭の素晴らしいことこの上なかった (Cap. / 63) Calaminhan と謁見したのち、大使は町のパゴデに度々行き、ここでそのパゴデの grepo から世界創造と神について説教を聞いた

(Cap. / 64) Timplão 到着後1ヶ月経って大使は Calaminhan から Bramá 王宛ての返事を受けとり、私たちは Pegu への帰途についたわけであるが、この Calaminhan で見たことをいくつか話そう。すなわち Calaminhan の地理上の位置、産業、Timplão の町の外観、宗教、生活様式、裁判、政治など (Cap. / 65)

私たちは Bidor の町を経て Pauel の町に着いてそこに3日間滞在したが、その町で私たちはさまざまな部族について見聞し、かれらの風俗習慣を知った (Cap. / 66) さて Pauel からさらに旅を続け、Lunçor の村、Penauchim 部落、Rauditens の要塞、Magadaleu の町、Madur 海峡を経て、Pegu 王国の最初の村 Mouchel に来たとき、私たちは Chalagonim という泥棒に襲われ、手ひどい目にあった。しかし、ようやく Martanão に到着し、にぎにぎしい出迎えをうけ、Calaminhan との同盟を祝って大祝祭が催された。

ところが、国の最高司祭である Mounai の Rolim が逝去したとの報が届いたため、すべてが中止されて、国民は喪に服した。そして埋葬に列するため Bramá 王は Mounai に赴き、ここで厳じゅくな、また豪華な葬儀がとり行なわれた (Cap. / 67) さまざまな儀式を伴うこの葬儀がすむと、故人の地位を継ぐ新 Rolim の選出が行なわれ、新 Rolim が Martanão の町に迎えられ、厳かな就任の儀式がとり行なわれ、華麗な随行をしたがえて Mounai に向かった (Cap. / 68 ~ / 69) さてそれから20日後、Bramá 王の乳兄弟 Chaumigrem が Savadi に出撃することになり、私たちポルトガル人捕虜もその出征に加わったが、戦争の混乱に乗じて逃げ出し、陰わしい山や湿地の中を進み、途中で山寺の寺守りにかくまわれた (Cap. / 70) その後、私たちはさらに旅を続けるうちに、こんどは船にのって川沿いに航行して行ったところ、泥棒の一群に襲われて、味方3人が殺されてしまった。逃がれた5人のポルトガル人は 遠りかかった親切なキリスト教徒の婦人に救われて、Pegu 王国の海港 Cosmim に連れて来られ、Luís Montarrolo

の船で Bengala 王国の Chatigao 港に行き、ここから Goa に向かった。Goa で、私を Martanão に派遣した かつての Malaca 司令官 Pero de Faria に再会した (Cap. / 7 /)

4. 第一次 Jona 航海

私は今度こそ「ましな上着を着られるかどうかを見るために、シナと日本方面でふたたび運を試すことにした」こういうわけで Sunda に向かい、Malaca を経て Banta 港に行き、ここからシナに行くつもりでその冬をここで過ごした。ここに滞在中、Jona とその周辺の島々の皇帝である Demá 王の要請によって Sunda の王が Passeruão 王征伐に向かうことになり、その地にいた私たちポルトガル人40人もこの出征に参加することになった (Cap. / 72) Sunda の王は1546年1月5日にBanta 港を出発し、Demá 皇帝の軍と一体になって Passeruão の町を包囲した。

ところで Passeruão の王は若く、国民に人望あり、そのため町は士気にあふれ (Cap. / 73)、精鋭の兵士たちが amouco となって包囲軍の先制を機して夜陰に乗じて出撃したので、包囲軍に多大の損害を与えた (Cap. / 74) 包囲は3ヶ月続き、何度も攻撃をしかけたが、Passeruão 側は勇敢に抵抗した (Cap. / 75) このような析りに、私たちは偶然にも、Passeruao 側にいたひとりのポルトガル人に会い、かれの身の上ばなしを聞き、かれを私たちと一緒に Malaca に連れて行くことにした (Cap. / 76)

ところが、Passeruão 側が籠城に耐えかねてきたのを見て激しい攻撃をかけようとしていた矢先、Demá 皇帝が作戦会議の席上で、小姓の少年の頭に手を触れたことからその少年に殺害されてしまった (Cap. / 77) ひそかに王の遺体を Demá に運ぼうとしていたところ、Passeruao 側に襲撃され、手痛い打撃を蒙った。ともかくも全軍が Demá に引きあげ、ここで新皇帝が選出されることになったが、皇帝空位に乗じて Demá の町は一時騒乱状態に陥った (Cap. / 78)

5. シナ沿岸航海

新皇帝が選出されたにもかかわらず Demá の地は暴動が絶えなかったので、私たちは Bata 港に戻り、シナに向かった。そして Chinceu 港に着き、ここに3ヶ月半滞在したのち、Chabaque 港に移ったが、争いがあったので多くのポルトガル人が死んだ。生き残った私たちは Java 海岸に向かったが、途中で岩礁に漂着した。ここでシナ人たちが作った筏を取りあげて、私たちは岩礁を離れた (Cap.

／79) 筏にのって波まかせに漂流しているうちに私たちは陸に着き、無人の森の中に入りこみ、通りかかった Java 人に救い出された。そして Cherbom という村で Selebes の商人に売られ、さらに Calapa の王に買いとられ、この王の手で Sunda の港に送られた (Cap. / 80)

6. 第二次 Sião 航海

Sunda 港滞在1ヶ月後、私は2人のポルトガル人と Siao の首都 Odiá に行き、日本に行くつもりで次の航海期を待っていた。ところが Quitirvao の町を包囲していた Chiamai 王と戦うために出征する Sião 王がポルトガル人に身辺の護衛を求めてきたため、他の120人のポルトガル人とともに私もこれに加わった (Cap. / 81) Sião 王は勝利を博し、Quitirvão の町を再建すると、さらに Guiliem 王国の Fumbacor を攻め、行く先々で Chiamai 王の部落を掠奪して Singuapamor 湖に着いた。冬に入りはじめていたのでここから Odiá に引き返し、Odiá では王の帰還を祝って14日間盛大な祝祭が催された。ところが、夫の留守中に不貞を働いていた王妃によって毒を盛られ、王はあっけなく死んでしまった (Cap. / 82) 死んだ Sião 王は人格すぐれ、国民の信望厚く、生前かすかすの輝やかなしい事績をなしていたのであった (Cap. / 83)

さて、Sião 王の葬儀が盛大にとり行なわれ、喪が明けると、臨終のさいに故王が定めていた新王が戴冠した。しかし、王妃は情人との間に生まれた子に王位を相続させるため、策を弄して新王を毒殺して、1545年11月11日に情人を王位につけたものの、1546年1月2日に両人ともある宴席で暗殺されてしまった (Cap. / 84)

Sião では早速に1546年1月7日に新王が選ばれたものの、先の政争で要人がいなくなり、新王に人望のないのを見て、Bramá 王は Sião 征服を決意し、1548年4月7日に多数の兵を率いて Martanao を発ち、途中 Taprau 要塞を陥落させて Odiá に着いた (Cap. / 85) ガリシア人 Diogo Soares を将とする Bramá 軍は Odiá を包囲したが、町は度重なる襲撃によく耐え、戦いはますます熾烈になっていった。(Cap. / 86～/87) Bramá 王が何としても Odiá を征服するため最後の猛攻撃をかける覚悟を固めたとき、故国 Pegu で Xemindó が謀反を起したとの報に接した。そこで Bramá 王はただちに Pegu に撤退し、1548年11月26日 Pegu 近くで Xemindó の軍と合戦を交じえ、Xemindó に大勝した (Cap. / 88)

ところで、「私たちがインドで持っているあらゆるものよりも、Sião を領有することの方が私たちにとって どんなに有利であるかを」わからせるために、私は

ここで Sião の事情を述べる。すなわち、その肥沃さ、産業、位置、軍備について (Cap. / 89)

7. ふたたび Pegu で

ところで Xemindó 謀反の原因は Bramá 王の Pegu 人に対する圧政であったので、王位につくと Xemindó はただちに Pegu 王国内のすべての bramá 人を殺害したのであった。このことを知った Bramá 王が、この Xemindó に加担した Xemin de Çatão という司令官を斬首させようとしたところ、Xemin de Çatão は機先を制して一族あげて Bramá 王を襲撃し、王を殺害した。Xemin de Çatão はさらに多くの Bramá 人を殺し、Pegu の王に擁立された。Bramá 王の死をひそかに知った Bramá 王の乳兄弟 Chaumigrem は配下にいた Pegu 人兵士をただちに解散させると、Bramá 人のみを率いてかれらの本来の祖国である Tangu へ急ぎ帰国した (Cap. / 90) Xemin de Çatão は Pegu の町と王国を支配しはじめたが、その政治に不公平があったために領主のあいだに不和が生じ、多くのものが Xemindó のもとに去った。

ところで、かって Bramá 王の時代にこの Pegu で栄華をきわめていた Pegu 王国の総督、ガリシア出身の Diogo Soares の運命を述べれば、かれは栄華の頃にある富裕な商人の一家に働いた無法行為の報いをこの Xemin de Çatão の時代にうけ、民衆の投石を浴びて無残な死に方をした (Cap. / 91) ~ / 92)

さて Xemin de Çatão の虐政が昂ずるにつれて、部下は離反して Xemindó のもとに走り、ついに Xemindó は Xemin de Çatão 征服のために Pegu の町に迫り、かれを敗った (Cap. / 93) こうして Xemindó は Pegu 王として戴冠し、3年半のあいだ良政をしいたが、1552年 4月 7日、先に Xemin de Çatão に殺された Bramá 王の乳兄弟 Chaumigrem の攻撃にあって敗れ、部下たちの勧めにより姿を消した (Cap. / 94)

Chaumigrem は勝利を得たが、配下の外国人兵のあいだに暴動が起り、その調停のために、Pegu の町に足留めされていたポルトガル人の助力を求めにきた。私たちはこの次第に驚くと同時に、これで生命の安全の保証を得られるものと考えて大いに安心した (Cap. / 95) 無事に暴動が治まると、Chaumigrem はその報賞として、Pegu にいるすべてのポルトガル人にインドへの通行証を発行してくれた。3年前から前任の王たちの非道に悩まされていた私たちポルトガル人は何よりもこれを喜んだ (Cap. / 96)。新 Bramá 王となった Chaumigrem は Xemindó を探し出し、Pegu 人の見せしめのために Xemindó に無残な死を与えた (Cap. / 98) それから、奇妙なことに、死んだ Xemindó のために荘厳な葬儀をとり

行ない、Xemindó に王国を返還し、かれからあらためて王位を引き継ぐという儀式を行なった (Cap. / 99)

第六部 「Francisco Xavier 神父の事績」

第六部以下は、これまでの冒険談、東洋部族の歴史・事情解説とすっかり趣きを異にする。はなしの中心舞台は極東の日本に移され、主人公は Francisco Xavier である。名誉心に起因する九州の領主間の争いが描かれたりするものの、主題は Francisco Xavier 神父の事績におかれる。作者はここで日本に2度航海したことになっており、2度目の渡日の折に神父と日本のボンゾとの宗論を傍聴したらしい。

神父のなした奇跡、シナに入るための援助を Malaca 司令官に求めようとして無駄に終わってしまった神父の努力について語り、この機をとらえて、Malaca要塞の内部事情と司令官たちの抗争・腐敗墮落ぶりに触れる。

1. 第二次日本航海

私たち160人のポルトガル人は Pegu の Cosmim 港から それぞれ儲けのありそうな地へ散って行ったが、私は Malaca に行き、1ヶ月後、そこから Jorge Alvarres と一緒に日本に向かった。私たちは Tanixuma を経て、Bungo 王国の Fucheo に行き、ここで大歓迎された。しかし、Fucarandono が、娘の失跡事件が因で Bungo 王に謀反を起したところから、国中が騒然となったため、私たち17人のポルトガル人は船にのって海に逃がれることによって奇跡的に難をのがれた (Cap. 200) この騒動で Bungo 王が殺されたことを知った王子は兵を集めて謀反人を征伐し、これを全滅させ、騒ぎは鎮まった (Cap. 201)

私たちは騒然たる Fucheo を去り、Canguexuma 湾内の Hiamango に移った。ここでは商品があふれていたが、大嵐のために一夜にして他の junco がすべて難破し、残った私たちは大儲けをすることができた。Hiamango を出発しようとしていたとき、追手に追われていた2人の日本人が助けを求めた。そのうちのひとり を私は Hiamango で見たことがあったので、かれらを連れて行くことにした (Cap. 202) 1547年 1月16日に Canguexuma を出発し、14日でシナの Chincheu に到着したが、海賊が横行していたので Lamau に行き、そこから Malaca に行った。Malaca で私たちはイエズス会のインド地方総管区長 Francisco Xavier に会った。神父は私たちが連れてきた日本人をひきとり、かれらをキリスト教徒にした。ところで、ここで、神父が行なった奇跡のうち、一般に「Achem 人の奇跡」と呼

ばれているものを紹介する (Cap. 203)

2. Achem 人の奇跡

〔以下203章から207章にわたってこの奇跡が報告されるが、作者がこのとき Malaca にいてこれを目撃したのか どうかははっきりしない〕

1547年10月9日に Achem 王の大艦隊が Malaca の港に到着し、たまたま海で漁をしていた味方の parao が捕えられ、兆戦状が届けられた。しかし Malaca 要塞には壊れた fusta 船があるきりで、敵の背に吠えてやる力すらなかった。居合わせた Francisco 師は人々を鼓舞して、キリストの栄光のために壊れた fusta 船を修理するよう勧めた。そのおかげで、1ヶ月でも不可能と思われたことがわずか5日で完了し、7隻の fusta 船より成る艦隊が Achem に向かって聖戦をしに行くことになった (Cap. 203)

艦隊が出発しようとしていたとき、最良の fusta 船1隻が転覆してしまったが、Francisco 師はその失われた fusta 船の代わりに神が早急に2隻の船をもたらし給うと予言し、その予言は的中して、その日の夕方60人のポルトガル人ののり組む2隻の fusta 船が要塞に着いた (Cap. 204) こうして新たに2隻を加わえて艦隊は1547年10月25日 Malaca を出発し、Parles 川で Achem の大艦隊と戦いを交じえ、敵は圧倒的多数であったにもかかわらず これをみごとに敗った (Cap. 206)

ところで、味方の艦隊が出発後、その消息が絶たれていたあいだ、Malaca では、艦隊はすでに全滅してしまったと信じるものが出て、この出撃を勧めた神父の悪口を言いはじめた。しかし、1547年12月6日のミサの祈り、神父は味方の勝利を聴衆に言明し、のちにわかったところによれば、まさに その時刻に艦隊は Achem 軍を敗ったのであった (Cap. 207)

3. Francisco 神父の日本・シナ航海 (Fernaõ Mendes の第三次日本航海)

Francisco 神父は Achem との戦いが終ると、日本布教を実現するために、Anjiro とともにシナ人の junco で1549年の S. João の日に Malaca を発ち、1549年8月15日に Canguexuma に着いた。Canguexuma に1年滞在したのち Firando に移り、さらに Cubuncama に謁見するために散々苦勞をなめながら Miacó にのぼったが、Miacó は戦火のさ中にあり、とても布教の実をあげ得ないことを知り、ふたたび Firando に戻り、ここからさらに Omonguche に行った。Omonguche に

1年滞在するあいだに3000人を改宗させたが、そのとき Bungo にポルトガル船が到着したことを知り、陸路 Bungo に向かった (Cap. 208) [このポルトガル船にのっていたポルトガル人の中に作者 Fernão Mendes がいたものと思われる。ポルトガル人たちを一人称複数で呼んでいるところから察せられるのである]

神父が Bungo に着いたことを祝って私たちが祝砲をあげたところ、Bungo の王は神父に興味を抱いた。そこで神父は王の求めに応じて王を訪問することになり、私たち30人のポルトガル人は神父をひき立てるために できる限り着飾って神父につきしたがって行った (Cap. 209) 神父の偉容を見て、王や居並ぶ領主たちは、ボンゾたちが神父について言っていた中傷が偽りであることを知った。そして神父はそこに居合わせたボンゾと宗論を戦わし、結局そのボンゾは言い負かされて退席した (Cap. 210) 王は神父に教化されて今までの悪習を改めはしたが、政治的配慮からキリスト教徒に改宗するところまでは ゆかなかった。一方ボンゾたちは高僧 Fucarandono を招いて、神父と宗論を戦わせた (Cap. 211) しかし、王がボンゾを手きびしく遇したためにボンゾたちが謀反を起しそうになったので、私たちポルトガル人は身の危険を避けるため出帆を急ぐことになり、神父にも乗船をすすめたが、神父は、改宗者たちのために Bungo の北に留まることを主張した。私たちは神父の熱意に負けて神父を待つことにした。そこで神父は安心して、さらに高僧 Fucarandono およびその他のボンゾたちと議論を続けた (Cap. 212~213)

こうして ようやく私たちは Bungo の王に別れを告げて Fucheo の町を去ったが、7日目に嵐に会い、嵐の最中に15人をのせた1隻の *batel* が船から離れてしまった。神父は祈り、神が奇跡をなして *batel* を救い給うと言いつけ、そして実際に荒波に何日ものあいだ もまれ続けていたはずの *batel* が無事に戻ったのであった。この奇跡は1551年12月17日に起ったのである (Cap. 214)。 私たちはようやくシナの Sanchão 港に着き、神父は Diogo Pereira が船長をしている船で Malaca に向かった。

神父は日本人の改宗のためには先ずシナ人の改宗が先決と信じ、船中で相談した結果、その船の船長 Diogo Pereira の援助でシナに行く決意をかためた。Goa に着くと、副王 D. Afonso de Noronha は神父の考えに賛同し、Diogo Pereira と不仲の Malaca 司令官 Alvaro de Ataide が横車を押したために、この計画は 実現不可能となってしまった。神父は止むなく、孤立無援のまま別の船でシナに向かったが、シナの土を踏むまえに Sanchão で発病し、1552年12月 2日赤痢のため失意のうちに世を去った (Cap. 215)

神父の遺体は一旦 Sanchão に埋葬され、3ヶ月後 Malaca に運ぶため掘り返されたが、そのとき遺体は少しも損われていなかった。そのたの神父の生前かれの

悪口を言っていた ひとたちは その奇跡に驚いた。Malaca に 9ヶ月間埋葬されていたのち、遺体はさらに1553年12月10日 Goa に運ばれ、その途中にもいくつかの明らかな奇跡が見られた (Cap. 2 / 6) 遺体は1554年 2月13日に Cochim に着き、イエズス会の総管区長 Belchior 師父が途中まで出迎えに赴いて、壮麗な船の行列とともにGoaに着いた (Cap. 2 / 7) Goa における神父の葬儀は豪華をきわめ、遺体を拝するため に集まった人々の雑踏ははなはだしかった。その葬儀の日にひとりのポルトガル人が日本の Bungo 王から副王あての手紙と贈物をたずさえて Goa に着いた。手紙の中で Bungo の王はキリスト教布教のために神父の来日を要請していたので、副王は Belchior 師父に渡日を勧めた (Cap. 2 / 8)

第七部 「Belchior 師父の日本布教」

第七部も第六部同様、イエズス会の日本布教のものがたりである。中心人物は Belchior 神父であるが、ここでは作者 Fernão Mendes 自身がインド副王の大使としてきわめて重要な役割を演じ、一人称単数をもってその模様をこまごまと伝えている。

終章は全体のしめくくりであり、祖国のためにインドで自分が払った大きな犠牲が何ら報われないことについての不満が吐露される。

1. Belchior 師父の日本航海 (Fernão Mendes の第四次日本航海)

Belchior 神父は日本に行くために、1554年 4月16日に Goa を発ち、Malaca に10ヶ月滞在していたが、この間、Malaca では新司令官 D. António de Noronha が先に Francisco 神父の渡支を妨げた前任者 D. Alvaro de Ataíde 一派に厳しい処罰をしたところから、最初が起り、これが Belchior 神父の日本渡航の延期の原因になったのであった (Cap. 2 / 9) さて、私たちは1555年 4月1日に Malaca を発ち、Pulo Pisao 島を経て Patana に行き、ここで必要物資をととのえた。Lugor と Siao 沿岸を走っていたとき嵐に襲われたため Malaio の海岸に行き、Pulo Timao 島に着き、ここで3隻のポルトガル船に救出された。ここで別の船に変わり移って、1555年 6月7日に出帆し、12日後 Cauçhenchina 湾内の Pulo Champelló 島に着いた (Cap. 220) 私たちはここから Cantão 諸島を経て、Francisco 神父が埋葬されていた Sanchão 島に行き、神父の墓所を整備した。それから Lampacau に行ったが、日本に行く船がその航海期にはもうなかったところから、この港に1年間越冬せざるを得なくなった。ポルトガル人の交易の盛んな Lampacau との関連で、かってポルトガル人町があった Liampó からポルトガル人

が駆逐された いきさつが こまごまとここで語られる (Cap. 221) Lampacau に滞在中、Belchior 神父は、Cantao の獄舎につながれていた2人のポルトガル人を救出した。また1556年 2月19日にシナの Sansi 州壊滅の報が Lampacau に伝わり、そのため その地ではこの不思議な事件を畏れて さまざまの供養がいとなまれた (Cap. 222)

航海期が来たので、私たちは1556年 5月 7日に Lampacau を出発し、途中で散苦勞しながら ようやく Bungo の首都 Fucheo に着いた。私は、みな意見によって、Bungo 王がいるという Osqui 要塞に贈物をもって王に会いに行き、「インド副王の使節の任務を帯びて来たので、いつ陛下に謁見がかなうか知らせて欲しい」と頼んだ。王は鯨採りに行って留守であったが、間もなく戻り、私は招かれて王の邸で夕食をし、姫が演じた寸劇を見物した (Cap. 223) 6日後、王は Osqui 要塞から Fucheo に戻り、私は王の要請にしたがって副王の手紙をもって行った。王はヨーロッパに大へん興味を示した (Cap. 224) 私たちは神父の評判を高めるのに必要なもので身を飾ると、豪華な行列をつらねて神父のお伴をして王の宮殿に行った。神父は来日の目的を語り、王は神父を丁重にもてなし、キリスト教に改宗する期待を抱かせはしたが、2ヶ月半経っても改宗するにはいたらなかった。Belchior 神父は布教の実のあがらない ことに失望してインドに戻る決意をした。そこで私は副王あての返事を王から受けとり、1556年11月 4日 Xequé の港をあとにした (Cap. 225)

2. 終章

私たちは12月 4日に Lampacau に、そして1557年 2月17日に Goa に着いた。副王 Francisco Barreto は、「私が自分の財布から支払って行なったこの航海とその費用の代償として さまざまの申し出をしてくれた」が、私はそれを断り、その代りに、国王にどれだけ貢献したかを示す証明書を副王に書いてもらった。この証明書をもって私は、1558年 9月22日 Lisboaに着き、国王への貢献に対する恩賞下付を申請したが、結局それは一顧だにされず、長年の国家への奉仕は何の報いもうけることはなかった (Cap. 226)

註1. Peregrinação 第一章

2. Love for love (1695)

3. Le Gentil, Fernao Mendes Pinto, un précurseur de l'exotisme auXVI^e siècle, Paris, 1947, p.7~8